



# 北方民族博物館だより

## No.91



D24.3 白樺樹皮製ベリー採集用容器 30.7cm

ニブフ／ロシア連邦サハリン州ティモフスク地方チル・ウンヴド村 1970年代

北方の森や湿地ではキイチゴ類、コケモモ、ブルーベリー類、ガンコウランなどの漿果をつける植物、いわゆるベリー類が豊富にみられる。ニブフの人びとは夏から秋にかけてベリー類を大量に採集し、生食するほか、貯蔵して料理の材料や薬として利用してきた。採集や貯蔵には白樺樹皮製容器が用いられた。

本資料は一枚の白樺樹皮をかごの形に折り曲げ、縁の部分サルヤナギの根で縫い合わせて作られている。持ち歩くためのひもの取っ手がつけられており、貯蔵ではなく採集のために用いられていたものだという。

### 目次 Contents

- 1 表紙 白樺樹皮製ベリー採集用容器
- 2-4 第28回北方民族文化シンポジウム「環境変化と先住民の生業文化—家畜飼育・牧畜における適応」
- 5 講習会「シベリアのサケ餃子—ペリメニづくり」／講座「民族学と考古学—学問の系譜」
- 6 講習会「結城伸子とつくるグリーンランドのリストウォーマー」／  
講座「北極海の捕鯨民イヌピアットの一年の暮し」／  
ロビー展「キッズ・アート・イン・オホーツク」／ロビー展「北の状景から」
- 7 第5回はくぶつかんまつり／コンサート「野花南—馬頭琴と語りの夕べ」／  
移動展「サーミの工芸—サーミ民族ハンドクラフト展」
- 8 INFORMATION

## 第28回北方民族文化シンポジウム

### 環境変化と先住民の生業文化

#### —家畜飼育・牧畜における適応—

2013.10.5-10.6

会場 オホーツク・文化交流センター  
(エコセンター2000)

今年度のシンポジウムでは、「環境変化と先住民の生業文化」の第3回目として、環境変化が家畜飼育や牧畜に及ぼす影響と先住民の対応をテーマとし、2日間にわたって発表と討論を行いました。以下にそれぞれの発表の概要を紹介します。

#### 第1部：牧畜の諸相

「北アメリカ極北地帯の牧畜略史—グリーンランドとアラスカ、カナダの比較考察—」

スチュアート ヘンリ氏（放送大学）

家畜化される可能性のある動物は、北アメリカ極北地帯ではカリブー（野生トナカイ）がいる。しかし、数千年前から北欧やシベリアで知られているトナカイの牧畜は、イヌイトの伝統社会において出現しなかった。

北アメリカ極北地帯における牧畜は、近代の植民地支配という状況の下で、19世紀末～20世紀にかけて本格化した新しい生業活動である。グリーンランドでは、デンマーク政府の指導によるヒツジ牧畜が20世紀当初に、アラスカとカナダではトナカイおよびジャコウウシの牧畜が1880年頃に導入された。

いずれの地域でも、イヌイトが自ら由来の動物を家畜化することはなく、欧米による海獣類の乱獲や、カリブーの減少への対応として、国家が救済を目的に他所から家畜を導入した共通性がある。本発表では、導入された家畜種の違い、牧畜方法の違いをふまえて、極北地帯における牧畜文化の比較考察を行なった。



質問するスチュアート氏（左）と横濱氏（右）

「社会変化と牧畜民の生業変貌／適応」

平田 昌弘氏（帯広畜産大学）



発表者の平田氏

近年、牧畜民の生活は、新しい環境に対して変貌／適応している。一般に牧畜民は、家畜生産だけでなく、農耕、交易などにも携わる。また、牧畜という生業は、外部社会に依存した構造になっているため、外部社会の影響を特に受けやすいといえる。

本発表では、自家用車・トラクターの購入による定住化や局所的な過放牧、政治・経済構造の変化による定住化や生業崩壊、紛争による広域交易の終焉、高等教育化と賃金労働による人材流出など、西アジア、チベット、ヨーロッパの事例から、牧畜社会の変貌／適応を考察した。現代の社会構造を考えたとき、都市民・農民に対して牧畜民は圧倒的に弱者である。こうした状況にうまく対応し、牧畜社会を維持していく方法として、フランスにおける畜産物のブランド化の事例をもとに検討した。

#### 第2部：モンゴルにおける牧畜

「モンゴル国における牧畜業の現状について」

横濱 道成氏（東京農業大学）

モンゴル国では、5畜（ウシ、ウマ、ヤギ、ヒツジ、ラクダ）の生産物が農業生産物全体の約66%（2010年）に達し、農畜人口は就業人口の約33.5%を占める。モンゴル草原での家畜許容頭数は2,500万頭とされているが、1999年には3,500万頭に達した。頭数は雪害により一時2,500万頭に減少したが、2006年からは再び増加に転じた。ヒツジ：ヤギの家畜構成比は、1990年頃には3：1であったが、現金収入源となるカシミヤ毛の増産により、2006年には1：1.06となった。

家畜頭数は2007年に4,000万頭に達し、草原の家畜許容範囲を超過している。家畜構成比の変化や過放牧から、草原の植生バランスが崩れ、大規模な草原の荒廃が懸念される状態が続いている。ここで、家畜飼育頭数が国家政策で制限されなければ、草原植生の荒廃と砂漠化が加速するものと考えられる。

### 「モンゴル牧畜民の都市化過程—中国内モンゴル自治区ウーシン旗の事例から」

児玉 香菜子氏（千葉大学）



発表者の児玉氏

中国内モンゴルでは、改革開放政策から現在までの約30年間に、牧畜民が牧畜をやめて小都市へ移住し、第二・三次産業に従事する生業変化がみられる。中国では移住を制限する戸籍制度のため、大都市や内モンゴルの首府フフホト市などの中都市に人口が極度に集中することはなく、牧畜民は主に行政区域内の鎮とよばれる小都市に移住している。中国政府は改革開放政策以来、とりわけ2005年の「社会主義新農村建設」により、都市建設と牧畜民の小都市移住を積極的に支援してきた。さらに、2000年代から牧畜を禁止し、牧畜民の小都市移住を推進する環境政策「生態移民」も実施されている。本発表では、内モンゴル西南部オルドス市ウーシン旗を事例に、家族構成員の変化から、具体的な生業変化とその動因として作用する環境変化を考察した。

### 第3部：西シベリアにおけるトナカイ牧畜

#### 「シベリアのトナカイ牧畜民における環境および経済的変化の累積的影響」

フロリアン M. スタムラー氏（ラップランド大学北極センター）

本発表では、最も成功したトナカイ牧畜民の近年の発展によって引き起こされた累積的な影響に関する文化人類学的な研究を紹介した。西シベリア、ヤマル-ネネツ自治管区で行なわれた民族誌的、学際的調査の事例から、変化に対する反応は、生態学的、社会的、経済的变化による累積的影響を考慮することにより、最もよく研究することができることを論じた。ヤマルのケースでは、それらは極端現象を伴う気象状況の変化、急進的キリスト教宣教師の出現、採掘産業の発展などである。15年にわたるフィールドワークデータの分析から、それらの急激な変化に適応するヤマル-ネネツ自治管区のトナカイ遊牧の印象的な回復力を提示した。



発表者のスタムラー氏

#### 「ロシア、ツンドラ・ネネツにおけるトナカイ牧畜文化の存続と変化—サハ共和国との比較の中で—」

吉田 睦氏（千葉大学）

現在、世界の家畜トナカイの約7割（158万頭）がロシアで飼育され、さらにその半数は西シベリアのヤマル-ネネツ自治管区に集中している。ロシアのトナカイ牧畜は、ソ連期の農業集団化政策初期と終期に頭数を激減させながらも、現在に至るまで存続してきた。

トナカイ牧畜の存続には、外的・内的要因が影響すると考えられる。外的要因は、気候変化、共棲的/敵対的動植物相の変化などの自然的条件、経済活動などによる放牧地の質的变化、物理的喪失/奪取、経済・経営体制の変化、連邦/地方レベルでの補助・支援政策などの社会・経済的条件である。内的要因は、過放牧や牧夫の熟練度などである。本報告では、東シベリアのトナカイ牧畜と比較しつつ、西シベリアのネネツのトナカイ牧畜の特色を、現代的文脈の中で考察した。



第3部の質疑応答のようす（右は発表者の吉田氏）

## 第4部：東シベリアにおけるトナカイ牧畜

「極北地域における地球規模の変化とトナカイ飼育」  
ミハイル A. パガダエフ氏（世界トナカイ飼育者連合）



発表者のパガダエフ氏

トナカイ飼育は、極北の厳しい環境における伝統的生業として、20以上の北方先住民によって数千年間営まれてきた遺産であり、家族を基盤とする共同体による遊動的な生活様式、数百～数千キロメートルにおよぶ放牧地間の季節的移動によって特徴づけられる。トナカイは、先住民共同体にとって核心的に重要で、主要な食物や経済活動、生活方法、衣類、神話、祭礼を提供する存在である。

現在トナカイ飼育地域では、気候変化、生物多様性変化、社会経済的变化を伴うグローバル化が進行し、天然資源に対する関心が増加しつつある。そして、トナカイ牧畜の適応戦略は、政府の政策、急増する石油・ガス開発と採鉱活動、放牧地の消失、移動経路の遮断など、新たな外的要因によって脅かされている。

「東シベリア・サハ共和国におけるトナカイ牧畜と環境変化」  
中田 篤（北海道立北方民族博物館）

ユーラシア大陸北部で多様な民族集団によって営まれるトナカイ牧畜は、経済活動としてだけでなく、北方諸民族の伝統的文化維持装置としても重要である。

しかし、地球規模の温暖化による北方地域の気候変動は、家畜トナカイの餌となる植物や地衣類の変化、害虫・害獣の増減、河川流量の変化に伴う放牧地の縮小などを通じ、また牧畜民の副次的な生業である狩猟や漁労、採集への影響を介して、各地でトナカイ牧畜に多様な影響を及ぼしているとされている。



発表者の中田



会場質問のようす



閉会后、発表者らを囲んで記念の一枚

本発表では、サハ共和国東部のトンポ郡、オイミヤコン郡を対象地域とし、家畜トナカイ頭数の推移、気温や降水量の変化、トナカイ牧畜民に対するインタビュー調査の結果から、トナカイ牧畜と環境変化の状況、そしてそれらの関係について検討した。

\* \* \*

本シンポジウムの関連事業として、10月2日(水)、午後6時半から、オホーツク・文化交流センター、エコホールで「星野道夫Alaska星のような物語 希望編(晩秋～冬、そして再び春)」の上映会を行いました。この作品は、写真家・星野道夫氏が残した撮影日誌をもとに、写真撮影の主要な舞台となったアラスカの大自然を1年にわたってハイビジョンで記録し、星野氏が過ごした世界を再現したメモリアル映像です。上映会には、網走市や近隣市町村の住民を中心に150名の入場者があり、アラスカの風景や野生動物の生態などを楽しんでいただきました。

(学芸グループ 中田 篤)

## 講習会

シベリアのサケ餃子  
— ペリメニづくり

2013.10.19

講師 渡部 裕 (当館学芸員)

水餃子という料理は、中国北部からシベリア、ロシア極東、東欧にかけて広く分布し、具材はブタ、ヒツジ、牛などの肉、野菜類、キノコ類など地域によって多様です。カムチャツカの先住民に水餃子(ロシア語でペリメニと言います)が伝わると、トナカイ肉やサケが具材となってきたとされています。

当講習会を担当した筆者は、これまでもカムチャツカにおける調査旅行の際に体験した様々なサケ料理を博物館の事業で紹介してきました。カムチャツカは5種のサケが遡上する河川が多くあり、どこへ行ってもサケが手に入ります。最も一般的な料理は、ジャガイモとタマネギとともにサケの身がたっぷり入ったスープです。また、サケの身をミンチにして香草のディルやタマネギのみじん切りを加えて、塩コショウで味付けしたサケ・ハンバーグも人気の料理です。



博物館の庭で採れたディルの下ごしらえをする参加者

今回のサケ入り水餃子(ペリメニ)のつくり方は、先住民の女性から伝授されました。サケの身をミンチにして塩、コショウ、ニンニクのみじん切り、ディルを加え、さらに全卵、牛乳や水を加えてよく混ぜます。とくに水分を多くすることが大事です。餃子の皮は水と全卵を加えてよく捏ねて、直径8cmほどに薄く延ばした皮で具材を包み、半月状の両端をつなぐとペリメニの形になります。ロシアではこれを一旦冷凍しますが、今回はすぐに茹でて試食をしました。カムチャツカではスープ仕立てやマヨネーズとともに



完成品

に食べられることが多いですが、当館では熱いうちにバターを添えて醤油で食べる方法が好まれています。講習会の参加者は10名と少なく、少し残念でしたが、試食は大変好評でした。

(学芸グループ 渡部 裕)

## 講座

## 民族学と考古学 — 学問の系譜

2013.10.26

講師 岡田 淳子 (当館館長)

当館館長・岡田淳子が民族学と考古学の学問の関係について解説しました。

考古学は、綿密な発掘を基本とし、出土した遺構や遺物から過去を復元する学問です。日本では一般に、考古学が歴史学の一環であると考えられています。過去にさかのぼっても同じ民族が続いているので、そのような考えがあっても不思議ではありません。他方、北アメリカで考古学は「人類学」のなかに分類されています。米国の歴史が始まる約250年前までは、米国とは関係のない先住民の文化だったからです。

学問のあゆみを振り返ると、日本でも考古学が人類学として研究されていたことがありました。1880年代に創設された日本人類学会の中心だった坪井正五郎は、住居、貝塚、土器塚、墳墓など考古学的な研究項目も人類学の対象に含め、総合人類学的な考えを唱えました。その後も20世紀前半までは、人類学会が日本の考古学を先導していました。

民族学は、ウィーン留学から帰国した岡正雄や石田英一郎によって1930年代に日本へ導入されました。民族学は、その地で生活する人たちとともに暮らし、観察と聞き込みからその社会を知って、それを目的に従って組み立てます。地域的な広がりや求められ、精神文化など無形なものも探ることができる学問です。

民族学は、ウィーン留学から帰国した岡正雄や石田英一郎によって1930年代に日本へ導入されました。民族学は、その地で生活する人たちとともに暮らし、観察と聞き込みからその社会を知って、それを目的に従って組み立てます。地域的な広がりや求められ、精神文化など無形なものも探ることができる学問です。

考古資料と民族資料両方を扱う民族博物館の仕事は、「総合人類学」の視座に立つて行うべきだと館長は強調しました。従来、考古学と民族学は研究方法が違うのでそれぞれの分野で研究されてきましたが、これからは互いに補完する関係の学問として、ともに歩むべきでしょう。

本講座では、民族学・考古学をふくむ関連分野を研究してきた館長自身の思い出も多く聞くことができました。高校の夏休みに校舎の建築予定地で発掘調査を手伝い考古学に深い興味をもったこと、大学院で理系の生物系研究科に属する人類学科で学んだこと、ウィスコンシン大学で経験したアメリカの人類学教育や学生交流なども印象的でした。時代や国によって変わる学問分野を越えて、互いに連携しあって新しいものを発見していくことの重要性を、館長自身の経験をとおしても学ぶことができました。



講演する岡田淳子館長

(学芸グループ 山田 祥子)

## 講習会

結城伸子とつくる  
グリーンランドのリストウォーマー

2013.9.15

講師 結城 伸子氏（造形作家）

特別展の開催にあわせて、講習会を開催しました。題材は、グリーンランドの女性が手首にはめて使うリストウォーマーです。

講師は造形作家の結城伸子さんです。結城さんは、北方をテーマにした作品づくりにも取り組まれています。

結城さんに用意いただいたデザインは、一つは当館の所蔵資料から、もう一つは結城さんオリジナルのオオカミの文様の二つでした。

毛糸にはあらかじめ、文様を構成するビーズを通しておき、編み図に従って、0号という細い棒針を使って編んでゆきます。

苦戦する方が多く、時間内に完成することは難しかったのですが、後日何名もの方が、できあがったリストウォーマーを博物館に見せに来て下さいました。

(学芸グループ 笹倉 いる美)

## 講座

北極海の捕鯨民  
イヌピアットの一年の暮し

2013.9.16

講師 岸上 伸啓氏（国立民族学博物館 教授）

今回の特別展では、国立民族学博物館から多数の資料を借用しました。地域は違いますが、エスキモーの文化について長年調査研究をされている同博物館の岸上教授にエスキモーのなかでイヌピアットとよばれる北極海沿いのグループの捕鯨の歴史や捕鯨をめぐる一年の活動についてお話いただきました。

バロー村では、5月のクジラ猟の最盛期に40チームが沿岸でクジラの出現を待ちます。捕鯨はクジラを捕ることではなく、捕られにきたクジラを捕るという考え方があるので、チームのキャプテンは、どのクジラが捕られたがっているのかを判断します。

クジラの解体には他のチームからも手伝いを得て5～8時間かかり、肉や脂の配分のあとは祝宴が行われます。

捕鯨はそれに携わる人の、プライドと威信を確認し、アイデンティティや喜びを分かち合い、文化的に価値が高いとされる食べ物を供給し、民族的シンボルとしての機能も果たしています。子どもたちは大人になったら捕鯨のキャプテンになりたいと言います。

ここ50年くらいの間に、捕鯨にも変化があり、女性の捕鯨キャプテンも現れたということです。

(学芸グループ 笹倉 いる美)

## ロビー展

オホーツクシリーズ4  
キッズ・アート・イン・オホーツク

2013.11.1-11.10

オホーツクシリーズは、オホーツクの文化を紹介する連続展示として、平成24年度から始めました。4回目は、「キッズ・アート・イン・オホーツク」をテーマに、オホーツクに暮らす子どもたちの作品を紹介しました。作品をつくることを通して郷土について考える機会とし、またその作品を展示することによって、観覧者にもオホーツクの自然について関心をもっていただきたいと考えました。

作品づくりの際には、オホーツクの海岸で集めた流木を乾燥させ、白く塗ったものを用意しました。子どもたちは、さまざまな形の流木のなかから、気に入ったものを選び、じっと眺めることで浮かんでくるものを思い思いに表現しました。

なお、作品づくりの指導は、網走市立美術館の古道谷朝生学芸員にお願いしました。

(学芸グループ 笹倉 いる美)



作品づくりのようす

## ロビー展

オホーツクシリーズ5  
北の状景から

2013.11.14-12.1

オホーツクシリーズ5回目は「北の状景から」と題し、オホーツク地域の魅力を伝える写真・映像作品を紹介しました。

オホーツク地域は、春夏秋冬、一年を通して、人びとを引きつける被写体にあふれています。地元で暮らす者ならではの視点から撮影した、写真34点、映像1点の合計35点を展示しました。

作品出展にご協力くださいました皆様に感謝申し上げます。

(学芸グループ 笹倉 いる美)



「北の状景から」展示会場

## イベント

### 第5回はくぶつかんまつり

2013.11.3

博物館により親しんでいただくための催しとして、毎年11月3日の文化の日に開催しているはくぶつかんまつりも、今年で5回目を迎えました。芸術週間（11月1日～7日）中で常設展示の入場料が無料になるほか、この日だけの楽しい催しを多数行っています。今年も、常設展示のコンセプトでもある「衣」「食」「住」に「遊」を加えた四つのテーマごとに北方の文化を紹介しました。

「衣」は、モンゴル衣装試着コーナーでした。衣装には大人用も子ども用もあるので家族で試着したり、そばに設置した「住」のコーナー、モンゴルの移動式住居ゲルをバックに記念撮影したりするお客さんでにぎわいました。

「食」では、当館の渡部学芸員が現地で習ったレシピにそって作ったカムチャツカ風サケ鍋を無料で提供しました。その他、北方の伝統的な食材であるクジラを使った料理としてクジラ串やクジラ汁、およびサケ餃子（ペリメニ）などを販売しました。



屋外「食」のコーナーのようす

「遊」も、内容もりだくさんでした。第2回モルック大会では、フィンランドのゲーム「モルック」を二人一組のチーム対抗で競いました。また、北のどうぶつ輪投げ、投げ縄が屋外で体験できるほか、屋内には北方のいろいろなおもちゃを体験できるコーナー、オリジナル缶バッジづくりコーナーも設けました。

東京農業大学全学応援団吹奏楽部、ファンキーブラザーズによるミニコンサートも合わせて開催されました。また、みやまひろおさんによる似顔絵コーナー、ポートアルバーニ・ファンクラブによるメープルホットケーキなどの販売コーナーも盛況でした。

この日は、まつり終了の午後2時までに609名が来館されました。本催しの運営にご助力くださった出演者やボランティアスタッフの皆様、記して感謝申し上げます。

(学芸グループ 山田 祥子)

## コンサート

### の かなん 野花南 — 馬頭琴と語りの夕べ

2013.11.16

舞台女優のたなかたかこさんと馬頭琴・のど歌の嵯峨治彦さんのユニット「野花南（のかなん）」によるコンサートを開催しました。

モンゴルの伝統的な音楽やたなかさんが採話されたモンゴル民話「らくだの涙」のほか、アイルランド民謡「ドンシャン・ボルカ・グーグー」、嵯峨さんが訳詞をつけて歌われた「私の青空」等の幅広いプログラムに、満場の拍手がおくられていました。

(学芸グループ 笹倉 いる美)



嵯峨治彦さん（左）とたなかたかこさん（右）

## 移動展

### サーミの工芸 —サーミ民族ハンドクラフト展示

2013.11.16-11.28

斜里町立知床博物館（以下知床博物館）と共同主催して、北欧に暮らすサミ（サーミ）の工芸品を、知床博物館にて展示しました。

本展は知床博物館が受け入れたインターンシップ生の桑田瞳さんによる講演会「フィンランドの大自然とサーミ文化との出会い～沈まぬ夏の白夜、長く暗い雪に包まれた冬の世界～」の開催にあわせ行ったものです。桑田さんは現在フィンランドのイヴァロ市にあるサミの職業訓練校でサミの工芸品作りを学んでいます。北方民族博物館のサミ民族資料18点と、桑田さんの作品を展示しました。

なお前述の桑田さんの講演会は両館の主催で行い、他に各館で、ワークショップ「サーミデザインペンダントを作ろう」も開催し、桑田さんが学んだサミの技術の一端が紹介されました。

(学芸グループ 笹倉 いる美)

## ロビー展 温暖化するシベリアの 自然と人

総合地球環境学研究所プロジェクト  
「温暖化するシベリアの自然と人」共催

総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「温暖化するシベリアの自然と人—水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応」の成果から、東シベリアの自然環境と人びとの生活、そしてそれらに対する地球温暖化の影響について報告します。

### 関連事業

- ◆ 講座「トナカイ牧畜民の食卓」  
1月11日(土) 13:30-15:00  
講師：中田篤（当館主任学芸員／総合地球環境学研究所共同研究員）
- ◆ 講座「東シベリア永久凍土域の景観と水環境」  
1月26日(日) 10:30-12:00  
講師：檜山哲哉氏（総合地球環境学研究所）

平成26年1月7日(火)～1月26日(日)  
当館ロビーにて、同時開催【観覧無料】

## ロビー展 世界と日本の 楽しいけん玉

日本けん玉協会会長 丸石照機氏協力

世界と日本のけん玉70点を展示します。  
ユニークなけん玉の数々をぜひご覧ください。

### 関連事業

- ◆ 講習会  
「けん玉検定にチャレンジ」  
1月18日(土) 10:00-12:00  
認定証発行費100円
- ◆ 講座「世界と日本のけん玉」  
1月18日(土) 13:30-15:00  
いずれも講師は日本けん玉協会会長の丸石照機氏です。



## INFORMATION

### 行事報告

◆ 9～12月、網走市立南小学校、同呼人小学校、同西が丘小学校、同東小学校の4年生を対象に、ミュージアムスクール（出前学習・体験学習）を開催しました。本事業は（財）山田記念青少年育成財団の援助を受けて毎年実施しています。

◆ 10月26日(土)～27日(日)、北海道民族学会2013年度第2回研究会が当館講堂にて開催され、宇仁義和氏（東京農業大学准教授）、矢崎春菜氏（北海道大学大学院文学研究科博士課程）、小西信義氏（北海道大学大学院文学研究科博士課程）、田村将人氏（札幌大学特命准教授）、中田篤（当館主任学芸員）、山田祥子（当館学芸員）が研究発表を行いました。

◆ 11月22日(金)、平成3年2月10日のオープンから数え、北方民族博物館の常設展示観覧者数が70万人を超えました。70万人目となったのはシーカヤックで日本一周中の鈴木克章さんでした。この日は常設展示室入口でくす玉を割って70万人達成を祝いました。



常設展示観覧者70万人目の鈴木さん

◆ 11月23日(土・祝)、あばしりまなび塾フェスティバル（同実行委員会主催）に参加し「クリスマスのカードづくり」を行いました。約150名が来場し、切り紙やシールを組み合わせ、立体カードを作りました。



まなび塾フェスティバル

◆ 11月30日(土)、はくぶつかんクラブ「カラフルまが玉づくり」（講師：濱名亜璃紗解説員）を開催しました。

◆ 12月7日(土)、はくぶつかんクラブ「北の文様カレンダー」（講師：菅原章子解説員）を開催しました。

◆ 12月7日(土)～12月15日(日)、当館ロビーにて東京農業大学生物産学学部学芸員養成課程の展示実習による展示「オホーツクの農大根性」が開催されました。

### 学位取得

9月25日(水)、山田祥子学芸員が、北海道大学大学院文学研究科にて博士号（文学）を取得しました。

### 職員の異動

[採用]（平成25年10月1日）  
学芸員 種石 悠

### 北方民族博物館だより No.91

平成25(2013)年12月20日発行  
編集・発行 北海道立北方民族博物館  
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1  
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889  
e-mail: tonakai@hoppohm.org  
http://hoppohm.org

指定管理者  
一般財団法人北方文化振興協会